

論文要旨

| | |
|---|--|
| 氏名 | 瓜生 和彦 |
| タイトル (日英併記) | What is a Good Dentist?: Changes in Awareness of Dental School Students in Undergraduate Clinical Training (「良い歯科医師」とは？ —歯学科学生の臨床実習経験による意識変化—) |
| 論文の要旨(日本語で記載) | |
| <p>【緒言】 後進を育成していく歯科医療従事者は、将来歯科医師になる歯科学生が考える良き歯科医師像を把握しておく必要があると思われる。しかし、先行研究で「良い医師」に関する報告や「良い看護師像」に関する報告はあるが、「良い歯科医師」に関する本邦の報告は見当たらない。 2000年代に入り、歯科医学においてプロフェッショナリズム教育の重要性が増している。プロフェッショナリズムには様々な定義があるが、歯科医師という専門職の姿勢・行動様式・倫理観などをまとめる概念として、7項目の定義で分類している Stern の神殿モデルが妥当だと思われる。</p> <p>今回、歯科学生が「良い歯科医師」とはどのように考えているのか明らかにすること、また臨床実習を経験することによる意識の変化について検討することを目的に調査を行った。</p> | |
| <p>【方法】 歯学部歯科学生(平成30年度(2017年度)5年生)94名のうち、研究に対する同意を得た学生を対象にアンケート調査を実施した。 調査時期は、1回目が臨床実習開始時(2017年6月)、2回目が臨床実習中(2018年3月)、3回目が臨床実習終了時(2018年10月)の3つの時期である。</p> | |
| <p>【結果】 アンケートの回収率は、開始時 95.7%、実習中 94.7%、終了時 49.5%であった。</p> <p>1) Stern の神殿モデルへのカテゴリー分類 最も割合が多かったのは、開始時は「人間性」、実習中は「臨床能力」、終了時は「人間性」であった。</p> <p>2) 単語の頻出度 名詞では、多い順に開始時は「患者」「技術」「治療」、実習中は「患者」「治療」「技術」、終了時は「患者」「技術」「歯科医師」であった。 動詞では、開始時は「くれる」「できる」、実習中は「できる」「聞く」、終了時は「できる」「聞く」であった。 形容詞は、開始時は「良い」「高い」、実習中は「良い」「優しい」、終了時は「良い」「優しい」であった。</p> | |
| <p>【結論】 歯科学生が考える「良い歯科医師」について、「臨床実習開始時」「臨床実習中」「臨床実習終了時」に調査を行ったところ、臨床実習の経験を通して意識が変化したことが明らかになった。 また、臨床実習開始時は、「人間性」を重視し、「くれる」など受動的な表現が多い傾向だった。臨床実習中は、「コミュニケーション能力」を重視し、「する」など歯科医師としての立場を意識し能動的な表現が増えたと考えられる。臨床実習終了時は、「人間性」を再認識していることが推察された。</p> | |